報　告

親支援プログラム（Nobody's Perfect）を活用した虐待予防事業の評価と今後の課題に関する研究

望月由妃子[1)]，杉澤　悠圭[2,3)]，田中　笑子[1)]，冨崎　悦子[1)]
渡辺多恵子[1)]，恩田　陽子[1)]，徳竹健太郎[1)]，安梅　勅江[4)]

〔論文要旨〕

本研究の目的は，親支援プログラムNobody's Perfectを活用した「A市虐待予防事業『子育て支援講座』」の評価と今後の課題を明らかにすることである。対象は，2009年度講座参加者2グループ，講座担当スタッフで，質的研究法の一つであるフォーカス・グループ・インタビューを実施した。分析はエンパワメント（元気にすること，力をつけること）の概念に基づき類型化した。本事業は，多様な育児不安やストレスを抱え孤立していた母親をエンパワメントし仲間作りに貢献したことが示唆された。今後の課題として他機関との連携による支援の必要性等が挙げられた。

Key words：児童虐待，エンパワメント，フォーカス・グループ・インタビュー，親支援，Nobody's Perfect

Ⅰ．緒　　言

核家族，少子化，地縁・血縁の希薄化など子育て中の養育者を取り巻く環境が激変し，多様な育児不安やストレスを抱えながら孤立した中で子育てをしている養育者の増加があり，虐待等不適切な養育の増加が危惧される。子どもを健やかに育てるためには，孤立した状況下で子育て中の養育者を元気にし，その力を引き出し仲間とともに子育てができるような力をつけること，すなわちエンパワメントが求められる。2010年度全国の児童相談所が受け付けた虐待相談対応件数は，5万件を超えた（宮城県，福島県等を除く）[1)]。虐待の予防や対応に関する先行研究は，福祉，保健，看護，医療等の多領域，多職種から報告されている[2~5)]ほか，虐待防止法の改正も行われてきたが虐待件数は増加している。2004年度における虐待防止法の改正では，市町村の役割が明確化され市町村が虐待の通告先に追加された[6)]。地方の中核都市A市では，改正以降，幼い子どもを養育している母親からの虐待相談が増加し，市独自の虐待予防事業の立ち上げに向けて検討を始めた。虐待予防には個別支援が重要であるが，長期的，より効果的な観点から孤立した中で子育てをしている母親同士を繋げる支援が必要と考え，2005年度より市独自の虐待予防事業（以下，事業）として子育て支援講座（以下，講座）を立ち上げた。

本研究は，本講座を継続していくための事業評価として，本講座が受講した母親にどのような効果をもたらしているのか，講座の効果と今後の課題を明らかにすることを目的として，2009年度講座受講者2グループと講座担当スタッフ（ケースワーカー2名，相談員，

Determining and Assessing Future Tasks for the Nobody's Perfect Parent Support Program for the Prevention of Child Abuse
〔2414〕
受付 12. 2.23
採用 13. 7.18
Yukiko Mochizuki, Yuka Sugisawa, Emiko Tanaka, Etuko Tomisaki
Taeko Watanabe, Yoko Onda, Kentaro Tokutake, Tokie Anme
1）筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程（大学院生）
2）筑波大学大学院人間総合科学研究科（研究員）
3）日本学術振興会（特別研究員）
4）筑波大学大学院人間総合科学研究科（教授）
別刷請求先：望月由妃子　筑波大学大学院人間総合科学研究科　〒303-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1
Tel：090-3251-8331　Fax：029-853-3436

Presented by Medical*Online

保健師，講座担当事務）にフォーカス・グループ・インタビュー（以下，FGI）を実施し，エンパワメントの概念に基づき整理した。

Ⅱ．方　　法

1．子育て支援講座の概要

講座は，カナダで開発された親支援プログラム Nobody's Perfect（完璧な親なんていない！ 以下，NP）[7]を活用した。講座の進行は認定を受けたファシリテーターが行った。講座では参加者が主体となり「子どもの叱り方」や「ママのストレス解消」等，学びたいテーマを決め話し合いの中で学んだ。NP は親が親としての役割を果たせるように支援することを目的とし，毎回の学習内容は参加者のニーズに基づき組み立てられる参加者中心のプログラムである[7]。原田[8]も NP は保健部門ならではの子ども虐待予防プログラムであると述べている。日本には2002年に導入され講座終了後の実施効果も報告されており[9]，虐待予防事業としての活用が適切であると考えた。講座は週１回２時間，６週連続を１クールとし，１回の参加者は12名で年２～３クール実施した。講座受講者の選定は，「ママ友になって話そう！考えよう！」という講座の案内を広報掲載や新聞社等への報道提供を行った後に，担当事務が電話にて受け付けた。応募が定員を超えた場合には抽選を行い参加者を公正な方法で決定した。虐待予防事業として公募での参加者の他に相談や健診の場で育児不安や虐待を訴えた母親（以下，虐待リスクの母親）を毎回数名加えた。虐待リスクの母親の選定は，日常的に虐待ケースに対応する講座担当スタッフに依頼した。相談や健診の場で講座担当スタッフに虐待や育児不安を訴えて相談する母親の多くは孤立した状況下で子育てをしており，子育ての相談相手がいないことを示していた。毎回，虐待リスクの母親と公募で参加した母親を１つのグループとして構成し，１クールの講座終了時にはグループの仲間としてサポートし合える関係を構築することをねらいとした。講座開始５年目を迎え，虐待リスクの母親の変化や講座に参加した母親がサークルを作り活動している姿が確認されてきた。

2．本研究の対象者

本研究は，2009年度に実施した２回の各講座の最終回に参加した２グループの母親と講座担当スタッフを対象として FGI を実施した。FGI の参加者は，１～３歳までの第１子を育てている20～30代の母親（年齢：中央値33歳，幅32～37歳）で，第１回目受講者10名中８名，第２回目受講者12名中10名であり虐待リスクの母親が２名（A，B）含まれていた。最終回の欠席者４名はいずれも子どもの体調不良が理由であった。育児休業中の１名を除き全員が専業主婦であり，うち３名は転勤により他市から転入してきた人であった。また，育児サークルへの参加経験がある人が１名いた。FGI 参加者の子どもは全員未就園児であった。虐待リスクの母親は，A，B ともに父方祖父母との同居へのストレスがあり，家から出られず孤立した状況下で子育てをしており保健師に子どもをたたいていることを訴えたため受講を勧めた。しかし，A は車の免許がないため，本事業の対象者として担当ケースワーカーが会場までの送迎を行うこととなった。

講座担当スタッフは，ケースワーカー２名，相談員，保健師，講座担当事務の５名であった。

3．調査方法およびデータの収集

本研究は FGI を用いた質的研究である。FGI はグループダイナミクスを用いて質的に情報把握を行う科学的な方法論の１つであり，「なまの声そのままの情報」を活かすことができ，量的調査では得られない「深みのある情報」と単独インタビューでは得られない「積み上げられた情報」，「幅広い情報」，「ダイナミックな情報」を得ることが可能となる[10]。FGI の実施場所は，講座受講者は講座の実施会場，講座担当スタッフは，保健センター内の静かな会議室とした。データの収集には参加者の承諾を得てそれぞれ IC レコーダー３台を設置し参加者の声を録音した。また，情報を抜け漏れなく整理するため，観察者が目立たない場所で FGI の様子を観察，記録した。インタビュー中は番号札を参加者の名前代わりにすることで名前が外に出ないことを保証し，安心して討論できるように配慮した。所要時間は１時間半とした。インタビュー内容は，講座受講者には，①講座を受講して自分自身がどう変わったか，②プログラムをもっとよくするためにはどんな工夫や改善が必要か，③この講座により多くの人に参加してもらうためにはどうしたらいいのか，の３点であった。講座担当スタッフの FGI は，講座受講者の FGI 終了後に実施し，開始前に講座受講者の FGI 分析結果を提示した。インタビュー内容は，①講座担当スタッフの視点としてなるほどと感じた点はどこか，

Presented by Medical*Online

②この結果からこんなことがさらに必要と感じた点は何か，③今後この事業を充実させるために理想としてはどんなことをしたらいいと考えるか，の3点であった。講座受講者には講座の開講日にインタビュアーから，グループインタビューの目的，方法，日時，場所，名前が外部に出ることはないこと，問合せ先などを説明し，FGIへの参加協力の承諾を書面で得た。講座担当スタッフには講座受講者のFGI終了後に，講座受講者と同様の説明を行いFGIへの参加協力の承諾を書面で得た。

4．分析方法

ICレコーダーに録音された記録から正確な逐語録を作成した。観察記録による参加者の反応を加味し，心理士，看護師，研究職等複数の分析者で逐語録を確認しエンパワメントの概念に基づき分析した。

i．エンパワメントの概念に基づく重要アイテムの抽出

エンパワメントとは，元気にすること，力を引き出すこと，絆を育む力を発揮することである。エンパワメントの効果をもたらす対象の種別にみると，当事者自らが力を発揮するセルフ・エンパワメント，仲間同士やグループが力を発揮するピア・エンパワメント，コミュニティやシステムが力を発揮するコミュニティ・エンパワメントの3種類に分類できる[11]。また，Zimmermanら[12]は，エンパワメントを「個人が自分の生き方を主体的に生き，コミュニティでの生活に民主的な参加を獲得するプロセス」と定義している。講座受講者が子育て中の他の母親と出会い，講座を通して相互に力を引き出し合い，講座終了後も地域で繋がり合っていく過程がFGIの分析において確認されたことより，本講座の骨組みとなる重要カテゴリーをセルフ・エンパワメント，ピア・エンパワメント，コミュニティ・エンパワメントと位置づけ演繹的手法により分析を行った。

次に，重要カテゴリーの枠組みに基づき，逐語録より意味のある重要な言葉（重要アイテム）を抽出しマーカーで印を付けていった。

ii．サブカテゴリーの抽出

抽出した重要アイテムを意味のある項目としてまとめて見出しをつけ，サブカテゴリーを抽出した。

5．FGI参加者の性質とデータの信頼性，妥当性

FGI法についての先行研究では，信頼性，妥当性を高めるために，対象メンバーの選定法，インタビュー項目の設定法，インタビュアーのトレーニング等が必要であるとされている[13~15]。インタビュー項目の設定は，参加者のニーズを表現しやすいよう具体的な内容とし，半構成的に設定することで参加者がインタビュー中に自由に意見を述べ，討論することが容易なように配慮した。FGIの進行は，研究実施者がインタビュアーを担当した。参加者の自由な発言やグループダイナミクスを効果的に促進できるようインタビューガイドを作成し，事前トレーニングでインタビューに臨む経験をした後，実施した。分析の妥当性については，心理士，看護師，研究職等，複数の専門職間で議論を重ねて重要な言葉および重要カテゴリーを抽出し，FGIに精通した専門家のスーパーバイズを受けた。

6．倫理的配慮

本研究は，筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施した。参加者には名前や所属等の個人情報が外部に出ることがないこと，FGI参加の有無によりいかなる不利益も受けないことを説明し書面で参加協力の同意を得た。

Ⅲ．結　　果

事業評価と今後の課題を重要カテゴリー（セルフ・エンパワメント，ピア・エンパワメント，コミュニティ・エンパワメント）に沿ってまとめた（表1，2）。

1．セルフ・エンパワメントへの効果

セルフ・エンパワメントへの効果は，セルフ・エンパワメントのサブカテゴリー7項目を次の3項目にまとめ，見出しを付した。

i．子育て環境の肯定的変化

講座への参加を契機に，活動的な生活となった，配偶者とのコミュニケーションの活性化等，子育て生活の改善，子どもと離れての参加が気分転換やストレス発散の機会となり育児不安が低減した等，子育て環境の肯定的変化が語られた。

ii．母親としての自信の獲得

子どもへの対応について誰にも相談できず悩んでいたが講座の中で話すことができ仲間からアドバイスをもらったことで子どもへの対処法を獲得，子どもと二人の生活への自信，悩んでいるのは自分だけじゃないとの気づき等，母親としての自信の獲得が述べられた。

Presented by Medical*Online

表1　虐待予防事業の評価結果（セルフ・ピア・エンパワメント）

重要カテゴリー	サブカテゴリー 見出し	サブカテゴリー 項目	重要アイテム 講座受講者グループ1	重要アイテム 講座受講者グループ2
セルフ・エンパワメント	子育て環境の肯定的変化	生活の改善	活動的な生活の実現。生活にハリ	夫からの励まし 夫婦のコミュニケーションの活性化
		気分転換の機会	気分転換・ストレス発散の機会	一人の人としての参加がリフレッシュ。話せて楽に
		育児不安の軽減		今後の育児が楽しみ。子育てが前進
	母親としての自信の獲得	母親としての自信の獲得	子どもと二人の生活に自信。子どもへの対処法の獲得。自己開示の実現	悩んでいるのは自分だけじゃない 子育ての視野が広がり余裕の獲得 仕事も育児も気楽にやればいいという気づき
	プログラムへの満足感	講座継続の要望	講座継続の要望	達成感の獲得。講座終了への淋しい気持ち
		安心感のある講座	講座の進行方法が発言を促進	仲間の本音の開示が自己開示を促進。講座の進行方法が発言を促進
		講座参加による育児の学び	癇癪への対応を学び親子で安定。子どもと二人の外出への気づき。託児により子どもと離れる時間の大切さの気づき	子育ての悩みへの気づき。今後の子育ての悩みの予測と心の準備ができた。困った時の解決過程を学び活用へ。忘れていた大切なことへの気づき
ピア・エンパワメント	子育て仲間との交流の実現	子育て仲間との交流の楽しみ	育児を話せる仲間の存在。子育て仲間との交流の実現。ママではない自分としての交流の楽しさ	仲間のなまの声を聞けた喜び。ママ友の獲得による今後の子育ての楽しみ。ママ友獲得の目的達成感。気楽な話し合いの体験。仲間への共感
	子育て仲間との共感的関わりによる自己の成長	仲間との交流による自己開示と他者理解	仲間との交流が自己開示を促進，本音を吐露。参加者には皆子育ての悩みがあるという気づき	サークルで出せなかった子育ての悩みを相談 人見知りだったがリラックスし発言に向けた気持ちの動き
		自信の獲得	仲間の承認や共感による親としての自信の獲得	仲間の意見で慣れない子育てから気楽に頑張る子育てへの自信。子育てに正解がないことを知り自信を獲得
		自己の成長	仲間による肯定により消極的マイナス思考から女性への成長。ゆとりの獲得	仲間との話し合いで自分の育児の確認。発達を意識した接し方を学ぶ機会
		自己概念の肯定的な変化	悩んでいるのは自分だけじゃないという気づき。仲間の承認が前向きの姿勢へ	自分だけじゃなく皆同じ悩みを抱えていた。相手の思いを理解するきっかけを得た。テーマに基づいて考えたり話すことで緊張感がほぐれて深く話せた

ⅲ．プログラムへの満足感

講座参加への達成感，進行方法や仲間の本音の開示が自己開示を促進，子育ての悩みの気づきや今後の子育てに向けて心の準備ができた等，プログラムへの満足感が語られた。

〈講座担当スタッフの意見〉

講座担当スタッフは，講座受講者の自己開示による気づきや母親としての自信の獲得，他の受講者の行っている子どもへの対応方法を選択し実施，今後の子育てに対する心の準備ができた等の母親の成長は，本事業の成果を示していると語っていた。

2．ピア・エンパワメントへの効果

ピア・エンパワメントへの効果は，ピア・エンパワメントのサブカテゴリー5項目を次の2項目にまとめ，見出しを付した。

ⅰ．子育て仲間との交流の実現

仲間の「なまの声」が聞けた喜び，ママ友獲得の達成感，今後の子育てが楽しみ，出会いの体験や子育て仲間の共感等，子育て仲間との交流が実現した喜びが語られた。また，講座終了後も連絡先を交換し合うなどして講座で構築された関係を維持していくことが話し合いで決まった。

ⅱ．子育て仲間との共感的関わりによる自己の成長

講座の中でこれまで誰にも言えなかった自分の悩みを話し，他の受講者から「よくわかる」，「私も同じ」等，子育て仲間となった講座受講者にわかってもらえたと感じたことにより親としての自信を獲得，地元出身でなく知り合いが少ないため生活が消極的になり，私はだめな親なんだとマイナス思考だったが他の受講者か

Presented by Medical*Online

表2　虐待予防事業の評価結果（コミュニティ・エンパワメント）

重要カテゴリー	サブカテゴリー		重要アイテム		
	見出し	項　目	講座受講者グループ1	講座受講者グループ2	講座担当スタッフ
コミュニティ・エンパワメント	講座のニーズの高まり	子育て仲間との出会いのニーズ	ママ友のニーズの高まり。講座のチェック 講座との出会いの喜び	友だちがいない人が多いのでこの講座でママ友を作ってほしい。託児ありに飛びついた	家族内に大きなストレスがあった。ホームページやブログのできる人も子育ての悩みがあるママとしてステップアップしたい
		周産期からの講座の情報入手のニーズ	産婦人科への情報提供の要望	妊娠中に情報がほしい。産婦人科に案内を。産後鬱だったので新生児訪問時に情報入手の要望	健診の場での紹介だけでなく妊娠中からのアプローチが必要か。妊娠中から孤立感があるならば出産後ママ友はできない
	効果的な事業の周知方法	周知内容の工夫	6か月健診と1歳半健診で案内を。子育て支援センター・小児科・保育園・保健センターに案内を。チラシに詳細な内容を。キャッチコピーがいる	新生児訪問，6か月健診，1歳半健診での案内の要望。公民館，支援センター，保健センターに案内を。チラシに詳細な内容を	要保護児童対策地域協議会に広報の協力依頼を。担当者が交代し広報の仕方等が行政的になってしまったが今後工夫したい。市の職員に講座を紹介し参加者を紹介してもらう方が広報だけの募集より確実
	効果的な事業の実施方法	実施方法改善の要望	1クールの回数の増加 対象年齢の検討	講座は12人で。1クールの回数の増加。テーマを事前に知りたい。テキストの入手方法。楽しさが伝わる内容	虐待予防にはタイムリーな実施。実施は1クール6回。参加者のニーズと主催者側の認識に違和感。託児を当然と感じている参加者に感謝の指導を。講座終了後の迎えが遅く子どもがかわいそう
		託児スタッフの体制	託児への不満。子どもの情報をスタッフに伝えられる連絡帳を。スタッフの情報を		要望の全てを取り入れることは難しい。託児への要望への対応。保育士の活用。担当者に現代ママの特性を伝える教育。職員間のフォロー体制。発達障害の子どもには保育士の活用を
		講座対象者のリクルート			講座の情報を公民館関係者に提供し参加者を紹介するシステム作り。保健師に年間実施計画を。関係機関で気になった親への勧め方を検討。参加者は悩んでいるのは自分だけじゃないと気づく
		事業の運営			相談体制が5人での運営，参加者の増加には年間実施回数の検討が必要。託児にハイリスクの子どもは困難。1クールの回数の増加に健康対策課との連携。子育て支援システムの検討。予算化には事業目的や問題解決レベル等の評価基準を明確にすることが必要
		支援システムの課題と事業の独自性			民間の講座と市の事業の区別化には講座名の工夫を。民間の講座で虐待の人たちに対応できるか疑問。虐待予防事業として独自の方向性を持った継続。虐待予防事業として効果の評価が必要
		事業の評価			自己肯定感や自己尊重感，自己能力への気づきから子育ての自信へ。子どもの対応に効果的。母親支援には口コミ。リスク家庭の意識レベルの向上。悩みを解決する講座。ストレス発散や仲間作りの場。人見知りで友人ができなかったと発言，そんなにママ友はできないのか。虐待リスクの親の送迎，CWからメンバーの援助へ
		今後の支援体制			新生児訪問以降の継続した支援体制。子育て支援課の講座の運営が必要。虐待支援としてヘルパー派遣事業，養育支援訪問事業と講座とを結ぶ体制。講座の効果は数年後に出る，手厚い支援による参加の促し。虐待対応には長期的な関わり。複数の専門職の連携によるフォロー体制。子育て支援課と健康対策課の協働による連携と支援。保健師や保育士等専門職の役割の明確化。虐待レベルに応じた多様な支援の提供。保健師の意識化

Presented by Medical*Online

ら毎回，自分のやっていることを褒められたり一人の人間（女性）として肯定してもらう等の関わりにより自分の自信を取り戻すことができ成長した，皆同じ悩みを抱えていたことへの気づき，他の受講者の悩みを聞き同じ悩みを抱えていた母親として相手の思いを深く理解するきっかけを得た等，他の受講者に自分の気持ちがわかってもらえた，汲み取ってもらえたと感じる共感的な関わりにより成長できたことが語られた。

〈講座担当スタッフの意見〉

講座担当スタッフは，子どもをたたいていた二人の虐待リスクの母親が他の受講者の行っていた「たたく」以外の方法を選択し「たたく」ことを止めた等，母親の子育てに関する意識の向上，ストレス発散や仲間作りの場だった等の声は，本講座の成果だと考えられると語っていた。

3．コミュニティ・エンパワメントへの効果

コミュニティ・エンパワメントへの効果は，コミュニティ・エンパワメントのサブカテゴリー11項目を次の3項目にまとめた。それぞれの項目ごとに，①講座受講者の意見，②講座担当スタッフの意見とした。

i．講座のニーズの高まり

① 講座受講者からは，講座やママ友との出会いの喜びとともにこの講座でママ友を作ってほしい，本講座についての周産期からの情報入手を求める声等，講座のニーズの高まりを示唆する言葉が語られた。

② 講座担当スタッフからは，講座受講者は初対面の人に家族内のストレスを話していた，パソコンのスキルが上級でも子育てで解決できないことがある，本講座についての周産期からの情報提供が必要等，講座のニーズの高まりを確認する発言が聞かれた。

ii．効果的な事業の周知方法

① 講座受講者からは，健診時に講座紹介の要望，かかりつけの小児科医院・病院や児童館など子育て中の親が利用する施設への本講座に関する情報提供の要望，講座受講者からの口コミが一番等，効果的な事業の周知方法に関する要望が語られた。

② 講座担当スタッフからも講座受講者の口コミが有効という意見が出された。

iii．効果的な事業の実施方法

① 講座受講者からは，講座の1クールの回数を増やし隔週での実施を，子どもの対象年齢の検討等，実施方法改善の要望や託児スタッフの固定化，子どもの体調等を伝える連絡カードがほしい等，託児スタッフの体制に関する要望等が出された。

② 講座担当スタッフからは多様な意見とともに今後の課題等が出された。

講座担当スタッフは虐待予防の視点から年に2回と決めて実施するのではなく，必要に応じて適宜実施等，実施方法改善の要望，講座担当スタッフが担当に専念するために専任の保育士の配置を要望する声，常に担当職種を揃えて講座を運営する体制を維持していく必要がある等が挙げられた。講座対象者をどのように集めるか，関係機関で気になった親への講座の勧め方の検討や他課との連携の必要性が語られた。また，虐待予防事業として独自の方向性を持って継続するための講座受講者への質問紙調査による効果測定等の結果を示す事業評価が必要等が挙げられた。事業の成果としては，講座受講者に車への同乗を依頼し自力で受講に取り組んだ虐待リスクの母親の成長，本講座が受講者の悩みを解決する場となったこと等が語られた。今後の支援体制では，必要ならば会場までの送迎も行うという手厚い支援による参加の促しが必要，虐待対応に限らず子育て全般に関わる行政内各部署との連携による「虐待リスクの母親」を含む講座受講者への支援の必要性，厚生労働省の虐待対応の手引きにある虐待のレベルに応じた多様な支援の提供[6]等，今後の課題を示唆する多様な意見が述べられた。

4．虐待リスクの母親（A，B）の変化

Aは講座の初日，公用車を利用して参加したが，終了後に「講座受講者の中に近くに住む人がいたので来週からの送迎をお願いした」と申し出，以後の送迎は行わなかった。講座の中では子どもをたたいていることについて「言うことを聞かないから仕方ない」と発言した。他の受講者から「私も同じだから気持ちはすごくわかる」，「たたくよりおやつをあげない方が効果的」と他の受講者の行っている子どもへの対応方法を教えられたたくことをやめた。

Bは，「姑への不満が話せて楽になった，ストレスが解消した」と笑顔で語った。Bも子どもをたたいていると発言したが，「私も大好きなおやつをあげないことにする」と，講座受講者の実践している子どもへの対応方法を選択したたくことをやめた。

Presented by Medical*Online

Ⅳ．考　　察

1．虐待予防事業の評価と今後の課題

ⅰ．講座受講者への効果

虐待予防事業の効果として，多様な育児不安やストレスを抱え孤立化した中で子育てをしていた母親が子育て仲間との交流が実現し子育て仲間を獲得，講座終了後も維持する関係を構築した点で大きな成果をもたらしたことが示唆された。これは，本事業が地縁・血縁の希薄化，核家族化等，孤立した状況下で多様な育児不安やストレスを抱えながら子育てをしており，虐待等不適切な養育への移行が危惧される母親への支援として有効であることを示唆している。効果の要因として，ヘルプサインを出さない母親の中にも育児不安や孤立化等，育児困難感を有する母親がいるのではないかととらえ，講座受講者をグループとして構成し講座終了後にはサポートし合える関係を構築するという虐待予防事業のねらいが適切であったことも示唆される。また，エンパワメントが大きな力を発揮したことが示された。講座受講というコミュニティ・エンパワメントにより，参加者は自身の内面を開示し，講座を受講した他の母親からの承認や共感的対応等，ピア・エンパワメントを受けて，母親としての力を発揮するとともに子どもや配偶者，グループのメンバー等への対処能力（対人関係能力）を高める等，自分自身の持っていた力が引き出されていく過程が確認され，エンパワメントの連鎖が示された。また，全6回の講座中の欠席者の理由はすべて子どもの体調不良であり，子どもの回復とともに参加を継続していたことより，講座の中断者がいなかったことも本事業の大きな成果として示唆された。

ⅱ．虐待リスクの母親への効果

二人の母親は，他の受講者が紹介した子どもへの対応方法を選択し，たたくことをやめていった。同じ子育て仲間の言葉が二人の言動を変化させたといえ，本事業の効果であることが示唆された。子育てにおいて安心して話せる場があり安心して話せる友人がいることが重要である。講座担当スタッフは本事業が虐待リスクの母親にも効果をもたらしたことを確認し虐待予防事業として今後も継続して実施していくことを決めた。

ⅲ．本事業独自の対象者の選択方法の評価と今後の課題

公募での参加者は，「ママ友になって話そう！考えよう！」という講座のチラシの呼びかけに集まった母親であり，子育て仲間を求めている人と考えられる。一方で虐待リスクの母親は，相談や健診の場で育児不安や虐待を訴えており不適切な養育をしていることを自覚し，孤立した状況下での養育に困難を来し何らかの助けを求めてきた人である。相談員や保健師との信頼関係もできており，受講中の様子から受講後の関わりによる効果や変化の把握も可能であり，本事業の対象者の選択方法として適切であったと考えられる。しかし，本事業で活用している親教育プログラムのようなグループでの話し合いに向く人と不向きな人がいるのでその点での見極めは重要になる。

今後の課題として困っていることを訴えられない親を子育て支援に関わる各部署がどのように早期に発見し早期支援に繋げるかが重要になる。

ⅳ．NPの活用に関する評価と今後の課題

講座受講者のエンパワメントや肯定的変化に，NPのファシリテーションスキル（進行上用いる効果的な技法）が関連することが示された。NPのファシリテーションスキルとは，場の安全や安心感を保障するルールの存在，託児の活用，講座受講者が決めた話し合いのテーマ，グループの成熟に添ったアクティビティ（ゲーム等の活動）の活用，体験学習サイクルによる問題解決への取り組み等である。特に託児の活用は本講座の大きな要因であったと考えられる。託児は，多様な育児不安やストレスを抱え，孤立した中で子どもと二人きりで過ごしてきた母親に，週に1回，2時間，子どもと離れ，一人の人間として話し合いに集中できる時間を提供した。さらに話し合いのテーマを講座受講者が出し合って決めていく参加者中心のプログラムである点である。参加者が今，求めているテーマを決めて話し合うことが講座での話し合いの動機づけを高め，受講者の本音の開示を促進した。また，講座の質の鍵を握るのは，進行を担うファシリテーターの役割である。司会者や講師にならず進行役に徹するようファシリテーターとして日々の研鑽が求められる。

今後の課題として，市独自の虐待予防事業の継続実施に向けて，NPには含まれないが虐待の話題が出てきたとき，参加者から出た代替行為の提示だけでなく虐待が法律で禁止されている行為であることを伝え，虐待の予防に向けた適切な対処方法を示していくことも必要となる。

Presented by Medical*Online

2．本研究の限界と課題

本研究は，一自治体の一事業の調査結果である点において限界といえる。質的研究においては無作為抽出が行われることは少なく，数値による調査の妥当性を統計学的理論に基づいて評価することは困難である[16]。また，グループインタビューの対象者の選定については，属性等が偏らないように講座の最終回参加者全員としたが，量的研究と比較すると対象の偏りの度合いについて数値的に明らかにすることは難しく，その点が本研究の限界といえる。今後，質的研究の妥当性と信頼性を保つために，フォローアップアンケートの実施によるデータの評価，量的研究を組み合わせた比較等の検討が必要となる。

V．結　　論

NPを活用した虐待予防事業は，虐待リスクの母親を含む子育て中の母親の孤立防止やエンパワメントに有効な育児支援の一助となることが期待される。

文　　献

1) 厚生労働省．平成22年度福祉行政報告例の概況．平成23年11月9日．
2) 才村　純．児童相談所における虐待対応業務等の実態と課題．子どもの虹研修センター紀要　2007；5：13-22.
3) 坪井裕子．Child Behavior Checklist/4-18（CBCL）による被虐待児の行動と情緒の問題．教育心理学研究　2005；53：110-121.
4) 水谷知恵．子ども虐待の支援に携わる保健師が抱える困難さ．日本小保健学会誌　2009；18（2）：16-21.
5) 宮本信也．発達障害と子ども虐待．発達障害研究　2008；30：77-81.
6) 厚生労働省．児童虐待防止対策について．平成21年6月1日．
7) ジャニス・ウッド・キャノン．三沢直子監修．幾島幸子翻訳．完璧な親なんていない！―カナダ生まれの子育てテキスト―．ひとなる書房，2002：1-247.
8) 原田正文．親支援プログラムNobody's Perfectとは？日本の親にぴったり！虐待予防にもなるプログラム．保健師ジャーナル　2007；63（9）：774-777.
9) 柴田俊一．親支援プログラムNobody's Perfectの短期的効果について．子どもの虐待とネグレクト　2005；8（1）：114-118.
10) 安梅勅江．ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法　科学的根拠に基づく質的研究法の展開．東京：医歯薬出版株式会社，2004：1-12.
11) 安梅勅江．エンパワメントのケア科学　当事者主体チームワーク・ケアの技法．東京：医歯薬出版株式会社，2006：1-48.
12) Zimmerman M，Rappaport J．Citizen participation, perceived control and psychological conceptions. American journal of Community Psychology　1988；16（5）：725-750.
13) 安梅勅江．グループインタビュー法Ⅱ／活用事例編　科学的根拠に基づく質的研究法の展開．東京：医歯薬出版株式会社，2003：16-19.
14) 瀬畑克之，杉浦廉晴．質的研究法の背景と課題　研究手法としての妥当性をめぐって．日本公衆衛生雑誌　2001；48（5）：339-343.
15) 清水洋子，福島道子，高村寿子，他．プリシード・プロシードモデルおよびフォーカス・グループ・インタビュー法の活用と適応可能性　中年婦人の老後に関するニーズに焦点を当てて．日本地域看護学会誌　2001；3（1）：171-175.
16) 瀬畑克之，杉澤廉晴，マイクDフェターズ，他．質的研究における方法論の妥当性に関する検討―フォローアップアンケートの結果から―．プライマリ・ケア学会誌　2001；24（4）：277-283.

〔Summary〕

This study aimed to clarify a confirmation of effects and future tasks at Nobody's Perfect of parent's support program for preventing child abuse in A city. The participants in this study were two mother's groups who joined classes in 2009's and staff's group who participated in this project. We conducted a focus group interview of a qualitative method for three groups. Analysis carried out based on concept of empowerment. It suggested that this project empowered the mothers who had a variety of child-rearing anxieties and stresses. It also assisted these isolated mothers and helped them make new friends. It became clear that we would require the necessity for support by cooperation with other organizations.

〔Key words〕

child abuse, empowerment, focus group interview, parent support, Nobody's Perfect

Presented by Medical*Online